The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「内台融合」の「和声」 : 真杉静枝「南方の言葉」が語る異声関係
Author(s)	鄭, 卉芸
Citation	文化/批評. 2016, 7, p. 85-101
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75727
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「内台融合」の「和声」
——真杉静枝「南方の言葉」が語る異声関係——

鄭卉芸

はじめに

私の両親達は、明治の末期頃から、台湾に住んでゐる。

それで、私も度々、この島へ出かけてゆく機会をもつわけであるが、この間出かけていつた時には、この島の内の気配が、大へん複雑にゆれてゐた。

日本の南方政策の起点になるせゐで、南方へ向かつてあふれる内地からの人口が、みんなこの島を通過するわけである。

開発事業は、この島が根になつて沢山興されてゐる。いままでは、植民地として、土地は豊富であるし、わりにのんびりとしてゐたこの島が、いつぺんにあわただしい時代の颱風の下におかれてしまつたわけである。

ところで、この島を縦に貫いてゐる鉄道の旅客になつてみると、さういふいろいろな時代の波を通つて来る人、いろいろな地理を経てくる人が、今、実に雑多に入りまじつてゐる。

お国訛だけから云つても、内地からの船で、その日基隆に上陸し南方へ向つて走つてゐる人の中には、江戸ッ子から、九州、東北までの訛が入りまじつてゐる。

十代を台湾で過ごした真杉静枝（1901-1955）は、1940年の暮れから41年の早春にかけて、十数年ぶり二回目に台湾を訪れた印象を上掲のように「異郷の言葉」[1]と題された紀行に綴っている。

時は日中戦争以降、場所は小林躋造が台湾総督の任期内に打ち出した「皇民化、工業化、南進基地化」に基づく統治政策が敷かれた台湾。この島は1920年代から田健治郎が力を注いだ日本人と台湾人の「共学」、「共婚」などの政策による「同化」を経て、それがさらに強化された改姓名、国語（日本語）の使用、神社参拝などによる「皇民化」鍛錬を受け、次第に日本が「大東亜」の「共栄」時代に突入するための東南アジア進出の基地と化されるのだった。そういった情勢の中、台湾の人々がめざすべき方向として、単一的な「日

本」＝「日本人」＝「日本語」を示すことが何よりの要務であったこの場所で、真杉静枝は「内地」日本からの様々な「お国訛」を聞き留めた。

その彼女の目に、それから彼女の耳に響いた多様な声の色合いを持った「内地人」たちの目には、台湾の人々に向けて提示された、等質的な「日本」への「同化」という一本道を前提とする植民地での「共生」は、いったいどのように映っていたのであろうか。それを考えるにあたって、「異郷の言葉」と同じ時期に執筆されたと思われる、「南方の言葉」[2] と題された真杉静枝の短編作品を見ていきたい。

まず小説のあらすじを紹介しよう。東京・築地の本願寺の近所で生まれた木村花子は「内地」での結婚に失敗し、無一文になった上、両親も兄弟もいないので、幼友達をたよって台湾・台中まで来たが、その友達の夫は南支の野戦郵便局に出征しており、友達は子供を残してなくなってしまった。

途方に暮れた花子は、警察署へ将来について相談しようと、偶々人力車夫李金史の車に乗ったが、李が「日本人かと思へるくらゐ国語がうまい」ため、つい彼に自分の身の上話を打ち明けた。それから、彼女は李の家に厄介になって半月後、李と結婚し、李金史と彼の母と三人で暮らすようになった。

台湾で二年の歳月を送った花子は流暢な台湾語を身につけ、体全体に「どうみても内地婦人とは思へない位しみついてゐる本島人のにほひ」を漂い、周りから本島人の阿花（アーホン）だと思われている。

やがて、夫の李金史は小説本を読めるぐらいの日本語力を持つようになり、姑も熱心に「国語教習所」に通い続け、「国語常用者」になったのを見て、「阿花（アーホン）」として生活してきた花子は、そろそろ近所の人に自分の正体を明かそうと思った。

が、しかし。花子の姑は突然街道で水牛の角に撥ねられて亡くなり、外から駆けてきた李金史は老母の死に直面して、思わず大声で「カンニンニヤー」と、作品において初めての台湾語を発したのであった。

以上の要約から、さしあたり本小説は、タイトルの通り、台湾における言葉の問題をテーマとした作品として受け止めることができるだろう。しかもそれは「皇民化の絶叫！」が台湾の隅々まで響き渡っている[3] 時期における、国語＝日本語と台湾語の関係性を描いている。しかし、それは作品内容のすべてを示し出すものではない。「内地人」女性と「本島人」男性の結婚（「内台共婚」）を介して浮かび上がった「南方の言葉」の問題を単に二つの言語の問題に集約するのは、「同化」や「皇民化」政策が提示した単一的な「日本」＝「日本人」＝「日本語」という考え方を丸ごとのみこんでしまうことになるではないか。

この点を念頭におき、本論は階級的、性的など様々な差異から成した人々の複合的な声に焦点を当て、絶叫の中で淡々とした筆致で描かれた「南方の言葉」を読み返したい。

1.「共婚問題」から浮上した均質的でない「日本人」

まずは、「南方の言葉」の物語の軸となった木村花子と李金史が果たした「内台共婚」からみてみよう。

「共婚」、現在は聞きなれない言葉となったが、1920年代の台湾においては、新聞紙面を賑わした重要な単語の一つであった。「共婚」という言葉は、誰によって初めて使われたかは明らかにされていないが、1919年、台湾初代の文官総督田健治郎が就任以降、「内地延長主義」に基づき、「共学」、「共婚」政策を唱えた[4]影響を受けて、広く使われるようになったと思われる。それ以前、「共婚」が雑誌や新聞に取り上げられる際に使用された表現は、「混婚」や「雑婚」[5]であった。そして、「共婚」という言葉の普及に伴い、「共婚者」と呼ばれるものが誕生する。1920年代、彼等は世間から注目を集めるようになったのは、所謂「共婚問題」が表面化したからである。

「共婚問題」というのは、日本帝国内に存在する、日本戸籍法の適用の有無から生成した「内地籍」と「外地籍」に起因している。台湾では、日本の戸籍法は適用されず、なお独自の戸籍制度も制定されていなかったため、台湾の人々は「外地籍」に属し、厳密に言えば、法律上、戸籍を有しなかった。その結果、「内地籍」に属する日本人女性と「外地籍」の台湾人男性との婚姻は、明治民法788条が規定した「妻ハ婚姻ニ因リテ夫ノ家ニ入」ることができず、1933年から実施された「共婚法」[6]ができるまでは、法的に成立しないという「共婚問題」を孕んでいた。

「共婚」は本来、田健治郎が掲げた「一視同仁」、「内台融合」政策の表徴とでも言えたが、「共婚問題」はかえって日本帝国内部の「内（地）」と「外（地）」の境目を露呈しただけでなく、「内（地）」の中の亀裂の一端を覗かせた。「外」に反して、「内」では均等な権利や義務を保障するという建前は、「内地人」男性が「共婚」を果たせたのに対して、「内地人」女性が長い間に「外地」の家の前に佇むしか出来なかったことによって、ひび割れが生じたからである。

「南方の言葉」の物語の軸となったのは、そういった様々な差異を抱えた「日本人」同士の「共婚」であった。その視点に立って、さらに「南方の言葉」の検討を続けたい。

2.「内」から「外」へ赴く異色の「共婚」

何故に「南方の言葉」を異色の「共婚」作品と呼ぶのか。その質問に答えるには、まず、台湾総督府の支援を受けた、日本統治時代の台湾で最大の新聞『台湾日日新報』に掲載された共婚ストーリーを見てみよう。

1932年、前述した「共婚問題」の解決を図る便法が制定される一昨年、『台湾日日新報』は1月26日から3月15日にかけて、「婦人と家庭」欄に11回の「内台結婚の体験を語る」と名付けられた特集を掲載した。記事内容を読むと、「共婚」という言葉がしばしば見られるが、タイトルにおいて、当時よく耳にする「内台共婚」ではなく「内台結婚」にしたのは、恐らく国策結婚の印象を払拭するためだったと考えられる。さて、各回の見出しは以下の通りである。

・内台結婚の体験を語る（一）五人の子福者で家庭円満　殆んと日本式の生活ぶり
医学士　許章氏の家庭（1932. 01. 26）
・内台結婚の体験を語る（二）主人が好まないために　台湾服は余り着ません
楊承基氏の夫人（1932. 01. 29）
・内台結婚の体験を語る（三）内台の婦人達が集つて　意志の疏通を図りたい
弁護士　蔡式穀氏夫人（1932. 02. 02）
・内台結婚の体験を語る（四）広東語と福建語を習び　主人の親達と話が合ふ
何連養氏夫人さく子さん（1932. 02. 05）
・内台結婚の体験を語る（五）仕事の関係から改姓　母親とも円満に生活
頴川氏夫人百合子さん（1932. 02. 17）
・内台結婚の体験を語る（六）本島人の家庭生活から　夫婦喧嘩をなくしたい
黄文漢氏夫人千代子さん（1932. 02. 19）
・内台結婚の体験を語る（七）主人は忘祖と云はれたが　台湾のためには尽す覚悟
小田原伯可氏夫人輝子さん（1932. 03. 01）
・内台結婚の体験を語る（八）共婚法を制定するより　戸籍法を施行されたい
林熊光氏（1932. 03. 02）
・内台結婚の体験を語る（九）内台人の真の融合は　内台人の共婚にある
中壓―鍾新桂氏夫妻（1932. 03. 08）
★内台融和の体験を語る（一〇）理解の深い姑を持つて　幸福な生活を送る私達
楊海盛氏夫人淑子さん（1932. 03. 11）
・内台結婚の体験を語る（一〇）広東人と間違へられて　なり済ましてゐる私―

游桂林氏夫人田鶴子さん（1932. 03. 15）

上記したように、何故か「内台融和の体験を語る」と「内台結婚の体験を語る」と名付けられた第（一〇）回があり、筆者が確認したところ、「内台融和の体験を語る」という特集は存在しなかった。これは単なる誤植なのか、それとも、「内台融和の体験を語る」も元々特集タイトルとして挙げられたのを意味するのか、現時点は不明である。ともかく、この11回の「内台結婚の体験を語る」記事に現れた「共婚者」の特徴を整理してみよう。

まず、見出しからも分かるように、体験談を話した11組は全て、日本人女性と台湾人男性の「共婚者」である。次に、台湾人「共婚」男性の職業は医者、新聞記者、弁護士、公務員、商人など、全員有識者や富裕層に属していた。最後に、11組の中で2組は台湾で出会い結婚、1組は厦門で出会い結婚、残りの8組は全て日本で出会い、結婚した「共婚者」だった。さらに、その8組の出会った場所を詳しく見ると、東京6組、大阪1組、横浜1組、つまり日本の大都市に集中していたことが分かる。

これまで述べてきた「共婚者」像は何も『台湾日日新報』の特有なものではない。時期が少し後になるが、蔡秋桐「興兄」(1935)、庄司総一『陳夫人』(第一部1940、第二部1942)、坂口れい子『鄭一家』(1941)、王昶雄「奔流」(1942) などの文学作品において、同じような「共婚者」像が現れる。「内地」へ渡った台湾人のインテリ青年と日本人女性の「共婚者」は当時の新聞においても、文学作品においても、「共婚」ストーリーの主役であった。

それでは何故こんなに多くのインテリ青年が「共婚」を選んだのか。自分の「共婚」動機について、楊承基は以下のように語る。

> 結婚そのものに真の意味があるのであるが、或る人は或る物を目的として結婚し、又或る者は共婚を一つの踏台にする、と云ふ様に色々の動機があると思ひますが、僕等の結婚は自然のまゝです。[7)]

楊は彼がいう「自然のまゝ」とは何かについて、詳しく述べていない。しかし、ここでまず注目してほしいのは、彼は語りの中に、「共婚」と「結婚」を微妙に使い分けていたことである。さて、もう一人の「共婚者」、小田原伯可の結婚動機をみてみよう。彼はもう少し周りから理解しやすく、想像できる理由を挙げている。

> 私は矢張り中学から内地に行つてゐたから、台湾の立派な女性と知り合ひになる機

会がなかつた。その代り内地に於ては内地婦人からあらゆる善例を見せ付けられて居ました。それで自然内地婦人に対して憧れを持つことになりました。……[8)]

小田原は「内地」で長く生活していたため、自然に日本人女性に憧れを抱くようになったと述べたが、実は、彼がいう「憧れ」、また、楊が言う一つの「踏台」となる「共婚」はしばしば「共婚」文学作品のモチーフになった。たとえば、朱点人の「脱頴」(1936)に登場する台湾人青年三貴はまさしく、「共婚」を踏み台にして「万年給仕」の窮境から脱出した。一方、龍瑛宗の「パパイヤのある街」(1937)は、苦悩する台湾知識人男性陳有三が「共婚」及び「内地人」女性に対して抱く「憧れ」をこのように描いている。

しかしながら物置のやうな月三円也の土間で竹製の台湾床に凭りかゝつてゐる陳有三の和服姿を見やると、ひどく滑稽じみた場面であつた。それに儚ない望みかも知れないが、あはよくば内地人の娘と恋愛して結婚しよう。そのために内台共婚法も布かれたではないか。

しかし結婚となると先方の養子になつた方がいゝな、戸籍上、内地人籍になれば、官庁なら六割の加俸が来るし、その他なにかにつけ、利益があるからだ。いや／＼[9)]そんな功利的な考慮を埒外に押しやつても、比類なき従順さと教養の高いしかも麗はしい花のやうな内地人娘と一緒になれば自分の寿命を十年や二十年位縮めても文句はないぞ。だがこんな安月給ぢや、どうにもならないぢやないか。さうだ。勉強だ、努力だ、それが境遇の凡べてを解決するであらう。[10)]

陳有三にとっては、「共婚」がもたらす加俸などの経済的利益はもちろん魅力的だが、それよりも遥かに魅力的なのは、高嶺の花のような「内地人」女性と一緒になれることである。このような「外」の「内」への羨望は「共婚」文学によく登場する心理描写の一つだといえよう。しかし、文学作品の登場人物陳有三が抱く「共婚」夢を、実在の「共婚者」小田原伯可がそのまま実現したからといって、二人の「憧れ」が同質のものだと決めつけるつもりは毛頭ない。それでも、もう一度『台湾日日新報』の台湾人男性「共婚者」を顧みれば、小田原を含めて、彼らはほぼ全員「外地」から「内地」へ渡って、「内地」で「共婚」を果たしたことだけは指摘しておきたい。

実は、既に紹介した文学作品や『台湾日日新報』での「共婚」表象は殆ど「外」から「内」へ、という片方向のものである。台湾人男性と「共婚」した日本人女性は最終的に台湾で暮らすことになっても、最初の時点で台湾人男性たちの「内地」への移動があった

からこそ、両者の「共婚」行為が可能になった。そう考えると、真杉静枝が描いた「外地」台湾へ渡り、しかも「外地」で労働階級と「共婚」を果たした日本人女性が主人公となる「南方の言葉」は「共婚」の異色作と呼べよう。

3. 幾つもの「内」の声

さて、この異色の「共婚」のヒロインはいったいどのような人物なのか。

> 「(中略) わたくし、×××女学校を出ましてから、東京で結婚いたしましたのですが、その結婚は、実は失敗になりまして。もともと、両親も兄弟もない身の上で、少しばかりの遺産で学校を終へ、そして結婚したのですけれど、結婚に失敗すると同時に、一文なしになつてしまひましてね。——東京の築地の歌舞伎座の裏に本願寺がございます、あの近所で生れ、そこで結婚生活をしましたのですけれど、いよいよ結婚に破れてしまひますと、ひと思ひに台湾まで来てしまひましたのです」(10)

「内地」で二つの「家」を失って、経済的、社会的辺境に追いやられた木村花子は、更なる「外地」へ赴くのは、生きるよすがとなるものを求めるためであった。実際、このような「内地人」女性の「共婚者」像はそう珍しいものではない。

作品よりやや前の時期になるが、中野顧三郎は1913年7月20日に発表した「内台雑婚表と雑婚説」の中で、総督府参事官室の調査による日台雑婚表を紹介し、218組の雑婚カップルの中で「内地人」女性と「本島人」男性の組み合わせが僅か38組のみであるを指摘し、その理由について、「内地女の本島男と婚するは著しく国民的プライドを毀損する」からだと述べている。それから、「本島人」男性と結婚した「内地人」女性「の多くは蓋し免れ難き社会上の劣者たり敗者たる事情ありて然るものならむ」という[11]。中野が引用した統計数字は既に述べた「共婚問題」に左右されたかどうかはさておき、中野がいう内地女と本島男の結合によって毀損される「国民的プライド」についてもう少し考えるために、「内地人」女性「共婚者」に向けられた眼差しに注目したい。

それに関しては、医学士許章の夫人ウノエは、既に紹介した「内台結婚の体験を語る」の特集でこういっている。

> (中略) 私達の結婚でも世間の人々が色々な怪しい目で見てゐます。或る人が言ふには内地人が本島人と結婚するのはお金に憧れてゐるからだと云ふのです。そして私の事を良家の娘ではなく芸者上りだらうとおつしやる方も御座いますが私達はそんな

噂に気をかけては居りません。一体に本島人は唯風俗や言葉が違ふだけで本島人の情も内地人と少しも変りはありません。私は内台人の結婚は好い事だと考へて居ります。……

それから、その特集にも登場した蔡式穀の夫人は他の記事で[12]、次のように語っている。

私達の結婚当時は共婚を理解する人達も少なく、外に出ると近所の人々が「内地人のくせに台湾人に嫁入して」と聞えよがしに言はれるのには、たまらない気がしました、けれど私達は真底から理解しあつて居りますし、家庭生活では何の変つた所もありません。……何遍も申しあげたい事は内地人の偏見を直していただきたい事で、共婚なども本島人の人の方が理解して下さるのは不思議な程です。……終りに私達の口から言ふのも変ですが、「内地人はどん／＼[13]私達に見習つて下さい。内台融和の実践者としても大いに国策ですよ」と申上げたい位です。

『台湾日日新報』を概観すれば分かるように、「内台共婚」といっても、報道の関心は完全に「内地人」女性と「本島人」男性の結合に傾いている。つまり、「国民」の衆目に晒され、監視を受けるべき対象は、「内台共婚」の中でも特に「内女台男」の「共婚」の方であった。そう考えると、「内女台男」の「共婚」ばかりを見つめ、関心を持つ「国民」は恐らく「内女台男」の「共婚」でプライドが著しく毀損される「国民」でもあり、「内地人」の男性だと思われる。上に引用した二人の「共婚女性」の語りからは、「劣者」や「敗者」の「内地女」でない限り、「本島人」男性を結婚相手にするわけがないという世間一般に流通していた考え方を読み取れる。また一方、『台湾日日新報』が大大的に取り上げた「内地人」女性の「共婚」相手が全員上流階級に属し、殆ど「内地」経験を有する者であることからは、並でない実力者でない限り、「内地女」と結婚できるわけがないというメッセージを読み取れる。その両方とも、毀損された「内地人」男性のプライドを少し修復することができるのであろう。

以上の考察を念頭に置き、木村花子が台湾へ渡ってからの生活模様をみよう。

さて、幼馴染を訪ねて、台湾の台中まで花子が来たが、結局、その友達に死なれて途方に暮れた。そういった彼女は、「いつそ西も東も解らないこの島の土地で、まるつきり今までとはちがつた、思ひきつた生活をしてやりませう」(10)という気持ちになり、「台湾の田舎に入つて、何か本島人の相手の内地婦人らしい商売はないかしら」(10)と思って、台湾南部のこの小さな町にやってきた。

警察署へ将来について相談しようと花子は人力車に乗ったが、その時の人力車夫は彼女のいまの夫李金史であった。李は台北で銀行家の舎宅付きの車夫をしていたため、「日本人かと思へるくらゐ国語」(11) を話せた。そこで、花子は李に身上のことについて打ち明け、李の家に厄介になって半月後、彼女は李と結婚しようという気になった。その理由として、「李は、とても好人物ですし、この老人もいい人ですし、習慣や生活のまるでちがつたところで、自分が生きるのを何となく、ほつとした気持で考へられさうでしたのです」(11-12) と彼女は語った。この二人の出会いは一見微笑ましい異郷でのロマンスだが、詩人・文学評論家の高良留美子は以下のように、植民地の現実を指摘している。

> しかし花子が故郷から遠いこの町にくることができたのは、台湾の隅々まで、日本の警察網が張りめぐらされていたからであり、彼女と李金史とを結びつけたものも、まず国語＝日本語であった。（中略）二人は台湾の小さな町で偶然出会い、花子の方がまったく不安定な境遇にいたにもかかわらず、土地の言葉によってではなく、強い言語である日本語によって出会いを果たしたのである。それは植民地でしかあり得ない出会いだったとさえいえるだろう。[14]

外来の者として台湾へ渡っても、「外地」における「内地人」の花子の声は依然「内」の声、いや、彼女の場合、さらに「内」の声になったかもしれない。何故なら、花子が持つ声は国勢調査をしにきた役人たちをびっくりさせた「東京仕込みの優しい国語」(8) だったからだ。台湾文学研究者呉佩珍が指摘したように、日本帝国において日本語によって形成された権力構造は、宗主国（＝日本語を母語とする者）対植民地（＝日本語を習得する者）といった図式のほか、東京（＝標準語）対地方（＝方言）といった図式も内包している[15]。そういった「内」の頂点に立った声の持ち主が「外地」台湾、それも南部の、きわめて小さな町で住んでいることだけでも役人たちを驚かせたが、花子の身に起こった変化に対して、彼らは「まざまざと、いたはるやうな眼」(12) で眺めずにいられなかった。

結婚してわずか2年のうちに、花子は「ふと咽喉のふくれたやうな」(12) 上手な台湾語を習得した上に、役人たちから見れば、「花子の体全体に、どうみても内地婦人とは思へない位しみついてゐる本島人のにほひ」(12) を漂っている。高良によれば、ここの「にほひ」という表現は、花子の現地生活への溶け込み方が人から「にほひ」として感じられるほどになっていることを語っている[16]。

「南方の言葉」の冒頭において、花子は姑の呼び声に応じて登場する。彼女の名は「花子」ではなく、「阿花（アーホン）」であった。台湾式の名前に上手な台湾語を操る彼女はもはや「内

地人」女性の面影が微塵もなかった。そんな花子の変化を、「外地」生活へ溶け込んだ「内地」人の微笑ましい努力として見ることができるが、「家」へ入る女性が強要された、あるいは当然視された、夫の「家」への同化としてみることもできるのではないか。そもそも、花子が生活する場には、国語＝日本語と台湾語のほか、男声や女声など錯綜した声の権力構造が存在している。彼女が持つ「内」の声は李家に入った途端、「外」の声でもある。ただし、植民地体制下、彼女の「内」の声は充分に李の「家」の声と掛け合いする力を持つため、彼女は姑とは台湾語、夫の李金史とは日本語で話すことができた。

ところが、花子とその周りの人間関係についての描写をみると、彼女の声は李「家」の声によって制御されているのかという疑問が湧く。

たとえば、親交のある公学校の先生の吉川ミツ子が、花子を台湾人の阿花と思い込んで、公学校で子供たちに日本語を教える要領で話しかけてくるが、それに対して、花子は一向自分は内地人であることを明かさなかった。また、夫の李金史の日本語がどんどん上達になってきたことにつれて、花子が「そろそろ自分も着物を和服にして、近所の人に内地の女だといふ顔をすることにしようか」という描写からは、彼女は単に本島人の暮らしに溶け込んでいるのではなく、意図的に自分の正体を隠しているように思える。

木村花子は何故自分の正体を隠すのか。さきほど考察した「内地人」女性「共婚者」に向けられた眼差しを振り返ってみよう。李金史は人力車夫という職業である以上、花子は、「劣者」や「敗者」のレッテルを背負わなければならないのであろう。そう考えると、彼女はむしろ戦略的に「本島人」のにほひを身に纏い、口から台湾語の音声を発し、そういった眼差しを遮断するしようとしたのではないか。

4.「国語」と「内」の声と「外」の声

阿花として日々を送る花子が時々家事を早く済ませると、訪れるのは李金史の家の近くに建ったばかりの「国語教習所」である。彼女はいつもぼんやりと教習所の窓のところに立って、中を覗いていた。中にいる生徒達は一生懸命に日本語を覚え込む様子を見せる。そして、花子の姑も中の一人である。

「国語教習所」、正確に言うと、「簡易国語講習所」は1941年の時点で台湾全島に15000カ所も設置されたという。台湾総督府は皇紀2600年（1940年）に向けて「国語普及十カ年計画」を策定し、「国語理解者」を50%にまで引き上げる目標を掲げたが、結局51%という成績に達したという[17]。

台湾での「国語」教授法は「直接法」（direct method）と呼ばれる方法で、現地語と対訳せずに、完全に日本語による日本語教育を行う方法であった。何故このような教授法が

「国語」教育の現場で採用されたかについて、社会学者の小熊英二は次のように述べている。

この教授法を支持した教員たちの間には、「日本精神」は民族の「精神的血液」である「国語」によってのみ伝達できるものであり、言語に宿る精神を対訳によって注入することは不可能であるという認識があった。これは同時に、「国語」教育はすなわちそれじだい「精神の日本化」の役割を果たすはずであるという思想を伴っていた。……[18]

「直接法」で一体どんな風に授業が行われていたのかを、「南方の言葉」はこう描いている。

二人［花子と李金史］は畳の上に招じ入れられる。木村花子を、阿花（アーホン）と思ひ込んでゐる吉川ミツ子は、公学校で土人の子供達を教へこむ要領で、「タタミ、タタミ、タイヘン坐リイイデスヨ」といふ風に、畳を叩いて、まづ畳のはなしからはじめるのである。……（15）

即ち、実物で動作を示しながら、日本語を発するのである。こういった方法で果たしてどのぐらい生徒たちに「日本精神」を注入できたかは疑問だが、真杉静枝は「異郷の言葉」で、「国語」教育が教われる側にもたらした影響ではなく、「国語」教育が教える側にもたらした影響に目を留めた。

けれども、言葉のテンポののろさばかりではなく、台湾には、一種の台湾製の日本語のやうなものが、いつの間にか出来あがつてゐる。

この島の田舎へゆくと、それが普段の言葉になつてゐる。

台湾人ばかりの中に入りこんで暮す内地人達が、しらぬ間に作りあげてしまつた言葉である。

例へば、田舎の台湾児童ばかりの公学校などに行くと、先生が生徒を叱るのに「チヨツト来ル、頭出ス（ポカリと軽くやつて）帰ル……」

といふ風である。

一ばん単純な動詞ばかりが並ぶのである。

「アナタ、オ立チナサイバカリ困ルデシヨ、オカケナサイ、シナサイ」

といふ風な言葉が出て来る。

これが、台湾人対手に使ふ便宜上、はじめは口に出て来たものであらうが、知らぬ間に、内地人同士の間にまで、こんな言葉が出てしまふ。

「アナタ、ワルイヨ、ソレ……」

（中略）

でも、こん風に言葉のテンポがゆるみ、をかしな、動詞ばかりがならぶ言葉が出来あがつてしまふのも、私には、一方から考へて涙ぐむやうな気持で眺められるのであつた。

全く、日本の言葉を解しない人々の中へ入つていつて、今日の状態にまで導いて来た功績は、こんな変語が出来あがるほど、並大ていではないしみ入り方によつて得られたものなのである。(151-153)

現地語を一切排除した「国語」教育は本来醇正の国語を守ることに目的があったが、それが、台湾において「国語」の「並大ていではないしみ入り方」に伴って、かえって「国語」を「変語」にすることは恐らく誰も予想できなかったのであろう。現地語が一切入っていないが、いつの間にか台湾で聞こえてきた「テンポがゆるみ、をかしな、動詞ばかりがならぶ」「国語」には、もう一つの声との無声の対峙が刻まれていた。

さて、もう一度花子がよく行った教習所に戻ろう。ある日、東京の大学を出たばかりの郡守は花子がよく訪れる教習所の巡視にやってきた。演説した後に、郡守は教習所の実績を測るために、自分の帽子をとりあげて高く上げ、「サア、デハキキマスガ、ミナサン、コレハナンデスカ」と、何人も聞いたが、生徒達は皆しんと黙っていた。そして遂に、花子の姑は郡守に指名された。

するとこの時、老婆は、その赤い花カンザシをつけた姿で、もそもそと立ちあがつた。

皺くちやな顔に例のお愛想笑ひをしながら、固いあぶなつかしい発音で、

「ソレハ、ボウシデ、アリマス」

と答へた。一同は、ほつとしてゐる。窓のところの花子は、なんといふ

ことなくこの時涙ぐんでゐた。

「ソレハ、カミダナデ、アリマス」

と、尚ほ老婆は、郡守の指さすものを、臆せず答へてゐる。

その時から、李家の老婆は、若い二人から以後絶対に国語で話してもらふやうにし

た。

「お母さん、えらいものですね」

と、台湾語で云つても、ぷんとお婆さんはふくれてみせる。(19)

花子と国語教習所の接近はもちろん、彼女が「内地人」として、植民地権力との親密性を物語る。上に引用した場面について、高良は次のような見解を示している。

郡守の質問にたいする生徒たちの無反応は、日本の植民地権力が全力をあげてとり組んできた皇民化運動の中心をなす国語教育が、現場でほとんど効果を上げていないことを暴露するものだった。しかし李家の老婆の見事な答えは、その失敗をおおい隠し、反対にその成功を郡守につよく印象づけるという思いがけない結果をもたらしたのだ。花子が涙ぐんだのは姑の立派さと、それがもたらした結果への喜びのためだろう。この瞬間の花子の感情は、本島人の日本への同化を喜ぶ側にある。[19)]

姑まで日本語使用者になったということは、花子の生活に幾つの影響を及ぼすと考えられる。彼女の持つ「内」の声がやっと「家」の声になり、「外」の声ではなくなったことは、実家を失い、一度離婚を経験し、結婚二年経ってまだ子供を持たない花子にとっては、少し頼りになるものに違いない。また、李家が「国語常用家庭」になれば、食物や実用品の配給を多くもらえるなどの優遇が与えられるし、自分たちが功績をあげた「内台融合」の実践者であることを楯にすれば、もう「劣者」として見られることもないかもしれない。漠然とした本島人の日本への同化の成功よりも、彼女の喜びはもっと生活の切実なところから来ているのではないか。

5. 異声の「和声」

やがて、夫の李金史は小説本を読めるぐらいの日本語力を持つようになり、姑も「国語常用者」になったのを見て、「阿花(アーホン)」として生活してきた花子は、そろそろ和服にして、近所の人に内地の女だと自分の正体を明かそうと思ったが、思わぬ結末が待ち受けていた。

それは、老婆が往来で水牛の角に撥ねられて家へかつぎ込まれ、一時間たたぬ間に亡くなつてしまつたといふさわぎのあつた時のことであつた。いきなり、戸外から駈けて帰つて来た良人は、老母の死体のそばにぐたりと体を打ちつけると、大声で涙を流しながら、

「カンニンニャー」といつた。

花子は、この時ほど、良人をいとしく、手でさすつてやりたいやうに思つたことはなかつた。カンニンニヤとは、台湾語の畜生！とでも云ふやうな言葉である。思はずさう叫んだ良人を、花子は両手に抱へて泣きながらいたはるのであつた。(20)

「僕は、すつかり台湾語の方を忘れてしまつたよ」という李金史の言葉は彼の日常の言語使用状況を物語る。このシーンは李金史が作品において唯一台湾語を発した場面である。それまで、「南方の言葉」において台湾語は花子の姑と花子によって使用され、ずっと「女声」として表象されてきて、結末のシーンに初めて「男声」として現れる。作品において、李が発した「カンニンニャー」とは、台湾語の畜生だというふうに解釈されている。実は、中国語の表記は「幹你娘」と書いて、直訳すると、「お前の母親を犯すぞ」という意味。既に引用した呉佩珍によれば、この「男性性」に満ちる罵言の登場は、被植民者が去勢された男らしさ（masculinity）の奪還を図る象徴になる[20]。

様々な異声関係を描いた「南方の言葉」の最後において、被植民者が植民者の言語支配を破る兆しのようなものを見せたが、それが、「カンニンニャー」という女性侮蔑の男声によって暗示されることは、男声と女声による異声関係はより根強く、直しにくいものであるを示しているのかもしれない。

ところで、もう少し角度を変えて、花子の立場からこのシーンを考えてみたい。「殆んど本島人と思へぬくらゐ国語をうまく話す」李金史、「どうみても内地婦人とは思へない位しみついてゐる本島人のにほひ」を漂う木村花子。この二人はまさしく「同化」の優等生とでも呼ぶべき存在であった。しかし、この二人もまた「同化」の虚妄を生き続けていた存在だと思われる。

李金史と花子は、「南方の言葉」において睦まじい夫婦として描かれている。何一つ衝突も起こらなかった彼らの「共婚」は常に時代が要請する「内台融合」の和声（ハーモニー）を奏でていた。ところが、耳を澄ましてこの二人の和声（ハーモニー）を聞くと、それはいつも「和声」（日本語）のみであった。「共婚者」が世間の注目を集めると、その一員である花子はもちろん自分たちが置かれた時代状況を察し、二人の関係のアンバランスに対して敏感であろう。そういった状況の中で、自分がいくら「どうみても内地婦人とは思へない位しみついてゐる本島人のにほひ」を漂って上手な台湾語を話せても、夫との間ではいつも日本語のみを使用することは、花子にとって必ずしも居心地のいいものではなかろう。そういった彼女にとって、自分の持つある声を長い間抑え止めてきた李金史の絶叫「カンニンニャー」は台湾語としての意味よりも、その瞬間において二人の関係のア

ンバランスの解消を物語る言葉としての意味が遥かに重要なのではないか。そのため、「カンニンニャー」を発した李金史に対して、花子は「この時ほど、良人をいとしく、手でさすつてやりたいやうに思つたことはな」く、台湾語でもなく、日本語でもなく、両手で応じたと描かれている。

おわりに

以上、様々な差異から成した人々の複合的声に焦点を当て、その異声関係を考察することを通じて、「南方の言葉」の読解を試みた。その目的は、単一的な「日本」＝「日本人」＝「日本語」という考えが強化された皇民化運動の最中に執筆されたこの作品が描いた、支配と被支配の言語関係だけでは語りきれない人間模様を取り上げ、微妙な植民地の人々の生の息づかいを汲み取ることにある。

作品の軸となったのは、「内台融合」の表徴でありながら、表面化した「共婚問題」のせいで、「内地」と「外地」の境界線及び「内（地）」の中の亀裂を露呈してしまう「内台共婚」である。この作品は当時よく見かける「外地」から「内地」への移動で成就した「共婚」ではなく、「内地」から「外地」へ渡って果たした異色な「共婚」を描いている。

主人公となる木村花子は東京出身、女学校を卒業した、醇正の「国語」が模範とする声の持ち主である。実家も婚家も失った彼女は「国語」が普及した台湾で、問題なく生きるよすがとなる李金史と出会い、「共婚」したが、李の「家」に入った途端、彼女が持つ「内」の声は「外」の声でもあるようになった。作品の冒頭において、彼女は既に上手な台湾語を操り、「本島人」と見分けがつかないほど変貌を遂げている。それは夫の「家」への「同化」を要請する台湾側の家父長制の力が働いた結果だと思われるが、それだけではない。意図的に「本島人」女性を装ったのは、「内地人」男性が主体となる「国民」の監視から逃れる彼女の戦略でもあった。

次に、自分の正体を隠している木村花子がよく訪れる「国語講習所」の登場から、彼女と同じように「外地」へ渡った「国語」の現地でのあり様を検討した。登場した公学校の教師吉川ミツ子の喋り方から、当時台湾の「国語」教育現場で使用された「直接法」による授業の様子を窺い知ることができる。現地語と日本語との対訳を一切介せず、日本語のみで授業を行う方式が採用されたのは、「国語」に宿る「日本精神」を守るためであった。しかし、真杉の観察によると、それがかえって妙な動詞ばかりが並ぶ「変語」の「国語」を創出してしまった。しかも、その「変語」は「内地人」同士の間に広まっていった。にもかかわらず、「国語」の普及につれて、花子の姑もやがて「国語常用者」になるが、そのことは、いままでハンデを背負った花子にとって実質的に生活を変えるものであった。

たとえば、李の「家」の中での自分の地位を強固にすること、「国語常用家庭」として優遇をもらうこと、「内台融合」の実践者を楯に自分を守ることなど。

後に、李金史が結末に「カンニンニャー」を発したシーンに関しては、違った立場からの読解の可能性を提示した。それは、植民地文学としての「南方の言葉」を意識しつつも、容易に作中人物を支配、被支配というカテゴリーに振り分け、彼らが発する言葉を日本語、台湾語のみだと決めつけることを避けたいからである。理想とされた「内台融合」の「和声」には、様々な声の消長や拮抗が奏でられており、きれいに分離できるものではない。

注

1)『南方紀行』昭和書房、1941。本論では、ゆまに書房から復刻された、『女性のみた近代024 真杉静枝『南方紀行』』、2000をテキストとして使用する。

2)『ことづけ』新潮社、1941。本論では、ゆまに書房が復刻したもの、『日本植民地文学精選集19〔台湾編7〕ことづけ』、2000をテキストとして使用する。

3) ここは、真杉が描いた台湾の「皇民化」景色に関する表現を借りた。

「各郡に一社づつの神社が、近頃急設されたやうであるが、その神社の社務所の黒板には「皇民化の絶叫！」と、大きく書かれてある。神社から、午前五時には必ず打ち出される太鼓の響きといつしよに、さういふ絶叫がいま全島の山山の奥底にまで鳴りわたつてゐるやうな気が、私にはしたのである。」(「淡水」前掲『南方紀行』)

4)「台湾人同化策は共婚が捷徑　田台湾総督談」『大阪朝日新聞』、1921. 1. 17

5) 管見の限りでは、以下の幾つかの例を挙げられる。

・「台南通信　混婚」『台湾日日新報』、1898. 04. 02

是れ亦日本的同化の階梯たるを得ば祝す可しと雖も内地醜業婦と台湾放蕩紳士に請出され其妾となりたる者既に五名ありとは記すも紙面の穢れなり

・中野顧三郎「内台雑婚表と雑婚説」『台法月報』台法月報発行所、1913. 7. 20、pp. 35-38

・「同化と内台人雑婚　前提は戸籍法の改正と　長尾法務部長は語る」『台湾日日新報』、1919. 04. 01

6)「共婚問題」の解決を図るため、台湾総督府は長年戸籍法規を検討し、本国政府との交渉を継続しつつけていた。遂に、1933年1月20日に発布し、1933年3月1日より実施する、台湾総督府令第8号を以て、本島人の戸口調査簿を「戸籍」として転用し、「共

婚」に関わる入籍及び除籍などの手続きを定めて多年の懸案であった「共婚問題」に終止符を打った。詳細は栗原純「日本植民地時代台湾における戸籍制度の成立——戸口規則の戸籍制度への転用について——」『社研叢書 15 日本統治下台湾の支配と展開』台湾史研究部会、2004. 3、pp. 267-337 を参照すること。なお、府令第 8 号（通称共婚法）の策定により、「内台共婚」は合法的に成立し得たが、台湾人の「戸籍」は依然として完全に「内地」の戸籍制度との共通性を得ることなく、「内地」と「外地」との転籍が実現されることはなかった。

7)「共婚夫婦のかたる共婚座談会」『台湾婦人界』台湾婦人社、1934. 5. 1、p. 39

8) 前掲「共婚夫婦のかたる共婚座談会」p. 40

9) 原文は繰り返し記号を用いている。

10) 龍瑛宗「パパイヤのある街」『改造』第 19 巻第 4 号、1937。ここでは、緑蔭書房から復刻された、『日本統治期台湾文学　台湾人作家作品集　第三巻』、1999、p. 26 から引用した。

11) 前掲「内台雑婚表と雑婚説」pp. 179-180

12)「内台融和は　先づ共婚から　蔡式穀式夫人に体験を聴く」『台湾日日新報』、1940. 9. 5

13) 原文は繰り返し記号を用いている。

14) 高良留美子「真杉静枝『南方の言葉』を読む——本島人と台湾語への愛」『樋口一葉と女性作家　志・行動・愛』翰林書房、2013. 12、p. 338

15) 呉佩珍『台湾与東亜　真杉静枝与植民地台湾』聯経、2013. 9、pp. 113-114

16) 前掲「真杉静枝『南方の言葉』を読む——本島人と台湾語への愛」pp. 337-338

17) 川村湊『海を渡った日本語　植民地の「国語」の時間』青土社、1995、pp. 60-61

18) 小熊英二「日本の言語帝国主義【アイヌ、琉球から台湾まで】」三浦信孝・糟谷啓介編　『言語帝国主義とは何か』藤原書店、2002、p. 64

19) 前掲「真杉静枝『南方の言葉』を読む——本島人と台湾語への愛」pp. 341-342

20) 前掲『台湾与東亜　真杉静枝与植民地台湾』p. 122